

京都府教育委員会発行

醍醐寺新要録

醍醐寺の寺誌としては早く鎌倉初期慶延によつて編纂された「醍醐雜事記」があり、東大寺の「東大寺要録」や東寺の「東宝記」と並んで最も広く人に知られているが、その編纂の時期が早いだけに記事の内容が中世以降のことに及ばず、ために史料として利用しうる範圍も比較的限られていることが難とせられていた。然るに醍醐寺には別に「醍醐寺新要録」なるものがあり、記事はるかに詳密にして収載するところの史料も創建当初からほゞ慶長の中比にわたつている。にもかかわらずこの書は従来比較的世に知られるところ少なく、大日本史料がとどころにこれを引用しているのを除いて研究者の全冊を見うる機會は殆どなかつた。それは一にこの書がなお未刊の稿本として僅に編者の自筆本一部が寺家に蔵せられているに過ぎなかつたからで、その正確にして豊富な内容を知るものにとつてはその死蔵が惜しまれるとともに、その万一の災厄さえも氣遣われたことであつ

た。幸にも京都府教育委員会ではその文化財保護課の事業の一としてこの書の公刊を企圖され、去る昭和廿六年以来逐次その印刷に当られていたが、先比ようやく全廿二巻刊本三冊が完結し各方面に頒布せられた。この企画については当時の文化財保護課長、現京都大学教授赤松俊秀氏が終始自ら事に当られ、印刷原稿の作製については氏の指導の下に京都大学大学院学生諸君が多くこれに協力したとはいへ、原本との対校印刷の校正等は大むね氏が自ら責任を以つてこれを担当せられた由で、それによつてわれわれはここに最も信頼するに足る形において「醍醐寺新要録」のはじめの刊本をもつことが出来るようになつたことを感謝しなければならぬ。

本書の性質に就いては下巻々末に附せられた赤松教授の解題「醍醐寺新要録について」に詳しいが、今その大要を紹介すれば、本書はもと有名な義演准后が慶長九年上醍醐釈迦院蔵蔵において多数の未知の聖教文書——その中に慶延自筆の雜事記も含まれていた——を披見したことが動機となつて編纂に着手し、元和六年ころまで殆ど二十年に近い歲月を費して書上げたもので、編纂体例としては

まず一山の濫觴からはじめて上醍醐・下醍醐双方にわたる各伽藍、神祇、諸院、諸寺、諸堂の一々についてその草創、沿革、勤行、庄園その他に關する史料原文を列挙し、更に座主職、定額僧、三綱、装束、雜事等に關する諸史料を類聚している。而して各部ともそれぞれ更に編・類等を分ち、それぞれの項目には見出しを付け、その項目がかわれば同一の史料を何カ所にも分けて載せるなど、専ら利用者之便宜を第一に編まれたように見受けられる。但、ところどころ項目の見出しだけがあつてその史料の欠けているところの見受けられるのは、偶々その史料のお明らかならぬによるものと察せられるが、一面この書がなお稿本的性格を有することを証するものであろう。引用の史料としては慶延記(雜事記)をはじめ、古縁起、尊師(聖王)御伝、年中行事、醍醐要書、源運僧都記、俊慶法印記、深賢法印記、隆源僧正記、隆増法印記、法身院准后(滿濟)御記等いずれも寺内に伝えられたいわゆる一等史料のみで、かくの如き史料の利用は恐らく義演准后の如き地位のものにしてはじめて為しえたところであつたかと思われる。事実それらの中慶延記并に滿濟准

后日記等一二を除いては、その大部分が今日なお未刊のものであり、われわれは今後たゞこの新要録によつてその一部を利用しようゝこととなつたわけである。偶々寓目するところに就いてほんの一例を挙げれば、清滝宮猿樂に關聯して引用されている隆源僧正日記の如きは満濟准后記と併せて応永年間の觀世猿樂（特に世阿弥とその子元清）に關する最も正確な知識の根源となるべきものであろう（その方面の研究者には夙に知られているところでもあろうが）。現存醜副の諸伽藍の建築や仏像、繪画等の由緒、伝承についても本書に引用された諸史料が重要な徵証となるべきところが少なくなく、ひいて本書の出版が今後広くわが古文化財の研究の上に大いに役立つであらうことは疑なきところである。終りに京都府教育委員会が今後も引きつづきこの種の好史料の出版を継続せられ旧社寺課以来古文化財の調査と保護の上に常に指導的な役割を果されて来たそのかがやかしい伝統を一層光輝あらしめられんことを期待して己まなひ。（全三冊、A5版、一、三三三頁、図版八葉、京都府教育委員会發行）

——柴田 実——

J. G. D. Clark, Prehistoric Europe

—— The Economic Basis ——
Methuen, London 1952

先史考古学と先史学とは必ずしも同義語ではない。何故かならばその名称からして一は Archaeology であり、他は Prehistory であるからである。しかし先史考古学、先史学それに先史地理学というもその資料には共通のものも多く、ただ研究目的や学問の系譜が夫々に異るといへばよいであらうか。先史学は歴史学と地史学との中間に位置するむしろ先史時代に關する総合的な学問であるのに対して、考古学の一分科である先史考古学においては、何よりもまず遺物遺跡、しかも土器、石器その他いわゆる人工遺物の正確なる記述がその直接の研究領域になる。同様に先史地理学にあつては地域が問題になる。これに対して先史学では、これらのすべてを總括した先史時代の文化が問題にされるのである。その限りにおいて考古学が主とする人工遺物や遺跡は勿論のこと、地理学者や地史学者の問題にする環境や、人類学者が主として取扱う化石人類等に關することの一通りは知つてお

本書の著者は元來オックスフォード大学に育つた先史考古学者であるが、その学風にはイギリスの伝統ともいへべき先史学的傾向が強い。また中石器時代や北歐後氷期文化の専門家として名高く、その論著には The Mesolithic Settlement in Northern Europe—A Study of the Food Gathering Peoples of Northern Europe during the Early Post-Glacial Period—1936 等す、くれた先史地理学的なものがある。——本書の紹介は當時藤岡が雑誌の「考古学」(八一四、昭和十二年)に發表——。本書は表題のごとくヨーロッパの先史時代の人の經濟生活を、主として現実の遺物、遺跡を主たる資料として論じたものである。ただその場合従来の考古学的編年順的な記述をとることなく經濟段階に従つて徐々に論が進められ、しかも無言の遺物遺跡をして、出来る限りその社会や經濟生活を語らしめんと努力されている点が注目を引く。章を分つこと一〇、その間二章以下において低次の採集、取得經濟の段階から初期農耕に及び、ついで耕地、穀物、家畜にふれ、さらに人類の集落や家屋の形態を論じ、また文化人類学者が問題にする遺物のテクノロジーに關する事項を突